令和３年11月14日　北日本新聞

患者の放射線負担減

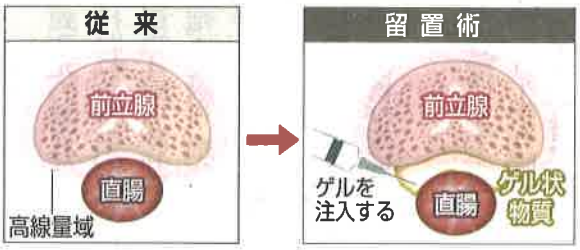
直腸保護にゲル利用

県立中央病院

県立中央病院（川端雅彦院長）は、前立腺がんの放射線治療を受ける前に、前立腺と直腸の間にゲル状の物質を注入することで放射線障害を低減させる治療法を導入した。９月から取り入れており、県内の病院では初めて。男性のがんで最も多い前立腺がんの治療で、放射線による直腸出血などの副作用を減らすことが期待できる。（藤田愛夏）

前立腺がんの治療

ハイドロゲルスペーサー留置術のイメージ



前立腺がんは、国内で年間９万人以上が診断され、１万人以上が亡くなっている。放射線治療は、がんが広がっていない場合に有効な根治法とされている。

前立腺は直腸と隣接しており、通常の放射線治療では、健康な直腸の一部も高い線量の放射線の照射範囲に含まれる。その影響で、副作用として、腹痛や直腸出血を引き起こす可能性があり、手術や輸血が必要になるケースもある。

導入したのは「ハイドロゲルスペーサー留置術」。数回から８週間程度かかる放射線治療に入る前に、前立腺と直腸の間に局所麻酔でゲル状の物質を注入する。ゲル状物質によって１㌢程度の間隔ができることで、直腸への高い線量の照射を防ぐことができる。この施術にかかる時間は30分から１時間程度で、公的医療保険が適用されるという。

放射線治療を開始した後の治療は従来通り。一度注入されたゲル状物質は、半年から１年後には自然に体内に吸収される。

同病院では、前立腺がんの放射線治療を年間約70件手掛け、従来の治療でも直腸出血の発生を０・５％以下に抑えてきた。それでも、患者への負担をさらに減らそうと、新たな治療の導入を決めた。

９月以降、既に約10人が施術を受けた。放射線治療科の豊嶋心一郎部長は「安全性が高く、患者へのメリットが大きい。多くの患者に、この手技を受けてほしい」としている。